

芦屋ユネスコ協会

AU 通信

「戦争は心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」

8月15日「平和の鐘を鳴らそう」行事实施

66回目の終戦記念日に当たる8月15日、本年は芦屋市、芦屋市教育委員会の「平和と人権事業」と共催して盛大に実施されました。市民センター正面玄関横の「優愛の鐘」広場に山中市長、福岡教育長始め、会員及びその家族を中心に市民やお盆で帰郷のお孫さんも含め120名強の皆さんが集い、～平和の祈りと願い～を込めた行事を実施しました。廣瀬会長、山中市長、福岡教育長の挨拶の後、ユネスコの平和宣言を一同高らかに唱和し、正午のサイレンとともに黙祷のあと、一人ずつそれぞれの思いを込めて「優愛の鐘」を高らかに鳴らし、平和の誓いを新たにしました。

この後、場所を市民センター301号室に場所を移し、懇親懇談会を実施しました。早速、会員有志に用意して頂いた戦時食の「ふかし芋やおにぎり」そして「すいとん」を食し当時を偲びながら、廣瀬会長の「戦争当時の体験談」の講演を頂いた。学徒動員や大阪大空襲や戦後の苦労や辛かった時代を偲び平和の大切さを語って貰い「平和への祈りと願い」を世界に向けて、芦屋から発信しようと呼べられました。次いで、山田事務局長から「ユネスコ活動とは・・・」と題して国連、日本ユネスコ協会連盟、そして我々芦屋ユネスコ協会の活動について詳細な説明と報告があり、今後のユネスコ活動と市民の皆さんの理解と支援協力の要請がありました。本行事の記念イベントとして声楽家・加藤純子さんによる「平和の歌を唄いましょう！」の披露と歌唱指導があり、「さとうきび畑」「見上げてごらん夜の星」をピアノ（金沢佳代子さん）ハーモニカ（錦 恵子さん）と手話の3人のボランティアの方のご協力を頂きながら全員で唄い、大いにこの集いを盛り上げて貰いました。



ユネスコは「平和の志」を掲げ、二度と戦争を起こしてはならない！世界の平和と人類の福祉に貢献することが活動の原点です。この心をつなげて行くためにも、芦屋ユネスコ協会の「平和の鐘を鳴らそう」行事は11年間途切れることなく継続実施されてきており市民の皆さんに定着されてきておりますとともに、マスコミにもこの芦屋の行事は毎年注目されております。本年も、NHKで放映され翌日の新聞(毎日、朝日、読売、産経、神戸各紙)に大きく報道されました。尚本年は、芦屋市並びに芦屋市教育委員会との共催で実施され意義あるものになりました。今年も参加された皆さまと、お手伝いに汗を流して頂いた会員の方々とそして全面的にサポートして頂いた教育委員会の皆様に感謝し、厚くお礼を申し上げる次第です。



芦屋ユネスコ協会

2011年8月15日
夕方 6時～

1 / NHKテレビ
06(6949)5500

00字 10分 テラス関西
▽戦争体験を語り継ぐ
▽暑い夏の救世主はミ
スト ※大阪以外別番組

120人鎮魂の祈り

終戦記念日 芦屋で「優愛の鐘」

終戦記念日の15日、芦屋市業平町の芦屋市民センターで、平和祈念のイベント「平和の鐘を鳴らそう」があった。約120人が第2次世界大戦の死者とともに、東日本大震災の犠牲者にも鎮魂の祈りを捧げた。戦時中の生活を思っすいとなんなどが振る舞われ、戦争体験を聞くなどした。



戦時中の生活を知ろうと、配られたすいとんを食べる参加者
—芦屋市内で

事(78)が「東日本大震災」を。阪神大震災から16年の被災者にも黙祷一年、われわれも平和を

願っていききたい」とあいさつ。正午から1分間黙祷し、阪神大震災の翌年にセンターに設置された「優愛の鐘」を参加者が1人ずつ鳴らした。

すいとんのほか、ふかしたさつまいなどが出され、広瀬忠子・同協会会長(84)が戦争体験談を語った。終戦

間際に大阪市内で空襲にあり、焼け野原を歩くと地面が熱く、焼け焦げた遺体が転がっていたといい、「戦後はみんながんばった。今年には震災があったが、日本はまた良くな

る」と東日本大震災からの復興に期待を寄せた。

【原田啓之】
参加した芦屋市の由里正雄さん(81)は、阪神大震災でマンションが壊れた。「東日本大震災は人ごとではない。戦争も震災もない、平和な世界であってほしい」と話していた。

いま問う
平和
夏
11

毎日新聞

2 2011年(平成23年)8月16日(火)

平成23年(2011年)8月16日 火曜日

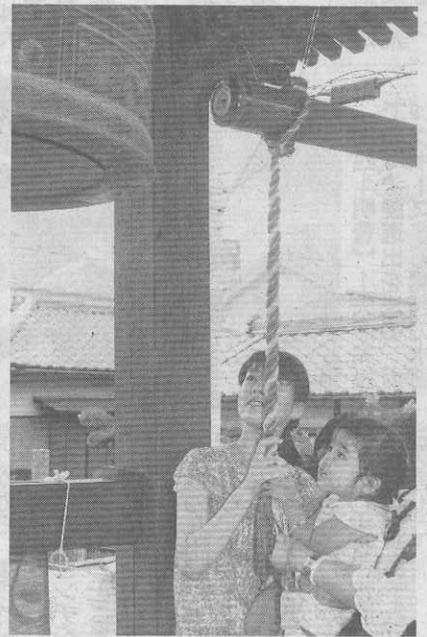
鐘鳴らし平和の祈り

終戦の日 阪神間でも行事

66回目の終戦の日を迎えた15日、阪神間でも各地で戦争の犠牲となった軍人・軍属や一般市民の冥福を祈る追悼行事が行われた。



「優愛の鐘」を鳴らしながら平和を祈る女性—芦屋市



浄福寺に戻ってきた鐘を突く親子—川西市

る追悼行事が行われた。

芦屋市民センター（業平町）でも鐘を鳴らし、平和を祈る催しがあり、約120人が参加した。

平成7年の阪神大震災の1年後、犠牲者の鎮魂のために作られた「優愛の鐘」で、13年からは終戦の日にも市民らが鳴らして平和を祈っている。祖父と一緒に参加した芦屋市春日町の市立小4年、由里和葉ちゃん（9）は「世界の戦争がなくなればいいな」と思いながら鐘を鳴らした」と話している。

戦争犠牲者に鎮魂の鐘

終戦記念日 芦屋で120人

終戦記念日の15日、親子連れら約120人が芦屋市公光町の市民センターで、「優愛の鐘」を鳴らし、戦争や、東日本大震災など災害の犠牲者の冥福を祈った。

鐘は1996年に阪神大震災の被災者を悼んで設けられ、市民団体「芦屋ユネスコ協会」（広瀬忠子会長）などが毎年1月17日と8月15日に市民に呼び掛けて鳴らしている。

産 経 新 聞

2011年(平成23年)8月16日(火曜日)

戦時中に食べられたすいとんやふかし芋が振る舞われ、広瀬会長が「防空壕の中で空襲の音を聞き、『いつ死ぬのか』と不安でずっと泣いていた」と戦争体験を語った。

帰省で市内の祖父母宅を訪れている東京都江戸川区、区立第三葛西小1年の奥村歩海さん（6）は「パパやママ、お友達みんなとずっとずっと仲良くできますようにと祈った」と話していた。

平和への思いを胸に、鐘を鳴らす市民ら（芦屋市公光町で）



終戦66年で集い 平和祈る鐘 市民ら鳴らす

芦屋



平和を願い鐘を鳴らす市民—芦屋市業平町

終戦66年を迎えた15日、芦屋市業平町、市民

センターで、玄関前の「優愛の鐘」を鳴らし、世界平和を祈る行事が開かれた。市民ら約120人が集まり、鐘の音を響かせた。

市と市教委、芦屋ユネスコ協会の主催。鐘は阪神・淡路大震災の犠牲者鎮魂のため、芦屋婦人会が設けた。1月17日と、終戦の日の8月15日に、鐘を鳴らす行事が毎年開かれている。

この日、正午に黙とうした後、1人ずつ順番に、二つの鐘を打ち鳴らした。ふかし芋や握り飯など、第2次世界大戦当時のような食事をし、体験談を聞く催しもあり、参

加者たちは耳を傾けていた。

母の実家がある芦屋市に帰省中という奥村歩海さん(6)―東京都江戸川

区―は「みんなと仲良くできたらいいなと思いがら鳴らした」と話していた。

(金山成美)

戦争の記憶つなぐ

芦屋「優愛の鐘」鳴らす



終戦の日の15日、芦屋市業平町の市民センターで、平和への祈りと願いを込めて、敷地内の「優愛の鐘」が鳴らされた―写真。芦屋ユネスコ協会が戦争

の記憶を語り継ぐと続ける取り組みで、市民ら約120人が参加。正午のサイレンの音を合図に黙禱した後、順番に鐘を鳴らした。同センターでは戦時中を

思い起こしながらおにぎりやふかし芋を食べたり、当時の話を同協会の広瀬忠子会長(84)から聴いたりした。

芦屋市春日町の由里正雄さん(81)は孫3人らと鐘を鳴らした。「参加することで子どもたちの記憶に残る。戦争の歴史や平和の大切さを学んでほしい」と話した。(瀬戸口和秀)

10月8日(土)午後1時30分～午後4時まで 尼崎の近松記念館ホール(2階)で第32回阪神間ユネスコ協会連絡会の合同事業が尼崎ユネスコ協会の担当で、

近松のまち・あまがさき ～近松の原作を通して～のタイトルのもと盛大に催された。

第1部 講演は「近松にとっての尼崎 ～作者として、人として～」と題して園田学園女子大学教授・近松研究所専任研究員の井上 勝志 氏のお話を伺った。尼崎が近松にとってかけがえのない地であったことはまちがいが無い。では、人としてどのような絆があったのか、また、作者としてどのように関わったのか近松記念館資料をたどって教えて頂いた。

近松門左衛門とは

一六五三年—一七二四年
本名・杉森信盛



近松門左衛門座像 (近松公園内)

近松門左衛門は、江戸時代に人形浄瑠璃(現在の文楽)や歌舞伎の世界で活躍した日本が世界に誇る劇作家です。

「東洋のシェイクスピア」と称され、「曾根崎心中」や「冥途の飛脚」「国性爺合戦」など、生涯一〇〇編以上の脚本を書きました。今でも多くの作品が文楽、歌舞伎、オペラ、演劇などで上演され、人びとに親しまれています。江戸前期の承応二年(一六五三年)、武家の子として福井に生まれた近松は、やがて京都、大坂に移り住み、浄瑠璃・歌舞伎作者として数々の名作を生み出しました。近松の作品は、流麗で音楽的な文章の中に、現実の醜さや悲しさ、葛藤、不条理といったものが込められているのが特長です。義理と人情の狭間で翻弄される人々や現世に絶望し、来世にかけた男女の純愛を力強く描き出しています。

さらに、世話物という、当時実際に起きた心中事件などを題材とした、当時の「現代演劇」ともいえる新しい演劇分野を創り出し、大衆の心をとらえました。そして太夫や役者が主役であった浄瑠璃、歌舞伎の世界で浄瑠璃本や狂言本に作者の名を記すなど、演劇界に新しい風を吹き込んだ功績は大きいと言えます。近松の芸術観をあらわしたとされる「芸といふものは実と虚との皮膜の間にあるもの也」(『難波土産』)という味わい深い言葉は、あまりにも有名です。

第2部人形劇は「日本振袖始(大蛇退治)」が近松応援団人形部のみなさんによって公演された。

「やまたのおろち」に奪われた宝剣を取り返すため出雲国へやって来たスサノオは、熱を出して苦しんでいた稲田姫を助けた。ところが、今年の大蛇のいけにえに姫が決まったのを知ってスサノオは大蛇を討ち取り姫を救った物語で近松の代表作の人形劇であった。

今回の担当の尼崎ユネスコ協会のご尽力のお礼申し上げます。

芦屋ユネスコ協会からは、今回の合同事業に13名の皆さんが参加されました。ご苦勞様でした。

日本振袖始

原作

近松門左衛門

II あらすじ II

むかしむかし、二ニギの尊が初めて帝になられました。これをよく思わない八岐大蛇は岩長姫に帝の大切な宝剣を奪わせました。

スサノオの尊は宝剣を取り返すため大蛇に住む出雲国へやって来ました。旅に疲れ、川の土手で休んでいると、花見をしていた稲田姫が、急に大熱を出して苦しみました。尊は、姫の着物の袖を脇あけにして熱をさましてあげました。そこで二人はすっかり仲がよくなりました。

ところが姫の父と母が「今年の大蛇のいけにえに姫が決まった」と悲しんでいるのを見て、スサノオは「私が助けてあげよう」と約束しました。スサノオの尊は八つの瓶に酒を入れて大蛇に飲ませ、酔ってヨロヨロになった大蛇をみごと討ち取り、腹を切り裂いて稲田姫を助けたのです。大事な宝剣を取り返し、国は安らかな平和を取り戻しました。

芦屋ユネスコ協会
年末講演会&親睦会のご案内

早いもので今年もいよいよ年末が近づいて参りました。皆様には如何がお過ごしでいらっしゃいますでしょうか。

今年度も恒例の芦屋ユネスコ協会の「年末講演会&親睦会」を下記要領にて開催いたします。どうぞ奮ってご参加下さいますよう ご案内申し上げます。

記

日時：**2011年12月20日(火) 18:00~20:30(受付:17:30~)**
◎今からご予約をお願いします。

場所：ホテル竹園 3階

内容：講演会・・・外務省特命全権大使（関西担当）政府代表 楠本 祐一 様
食事会・・・フリードリンク
ビンゴ・・・景品多数
エンターテイメント・・・乞うご期待

会費：6,000円（学生3,000円）—ビンゴ券1枚付：当日受付にて
会員はもとより非会員のご家族やご親戚、ご友人、お知り合いの方など多数お誘い合わせの上 お申込み下さい。

出欠届：往復ハガキをお出ししますので出席・欠席にかかわらず必ず返信して下さい。お問い合わせ等は下記までお願いします。
事務局 本荘 美恵 電話・FAX（0797）32-7910

締切日：2011年11月28日（月） ※締切日厳守下さい。
（早めに返事をして頂きますようお願い致します。）

お願い①**ビンゴの景品提供にご協力をお願い致します。家に眠っているもの(新しいもの)をお持ち下さい。当日受付にてお手渡しくだされれば助かります。よろしく。**
②**書き損じハガキがありましたらご持参下さい。**

編集後記

暑い夏も過ぎ大きな台風も過ぎなんとか静かな動きになってきました。天災とは言え大変な年でしたね。少し早いようですが年末親睦会のお知らせです。今年も為に成る講演会・美味しいお食事・ビンゴ・クリスマスソング等の演奏と盛り沢山でお待ちしています。年の瀬のあわただしい中ほんの一瞬ですが皆様とのひと時を楽しみにしております。ご家族・お友達等お誘いあわせの上多数のお申し込みをお願いいたします。

本荘 美恵